



謹んで新春のお慶びを
申し上げます



昨年末、この「ニュースレター」を楽しみに読んでくださっている方がいると知り、大変励みになりました。今年も子育てをする上で「なるほど～!」と思ってもらえるような情報を何かしら発信していきたいと思えます。つたない文ですが、お付き合いいただけると幸いです。

さて、今回は、ピグマリオン効果について。

新年にふさわしい話題はないか職員室で話していた所、フレッシュな若手教員より「自分はピグマリオン効果とゴーレム効果をいつも心に留めながら子どもと接しています!」と元気に教えてもらいました。

ピグマリオン効果とは、期待をかけると人が良い方向に変化すること。ゴーレム効果は、悪い印象を持つと人が悪い方向に変化すること。その先生は、子どもの可能性を信じ、「君ならできるよ。大丈夫。」と声をかけながらサポートしているというのです。

その先生は、まだ経験は浅いですが一人ひとりに寄り添う力はとても大きく、子ども達は先生が大好きです。教師として高度なスキルがなくても、親として高度なスキルがなくても、自分を信じ寄り添ってくれる人間がいれば、おのずと子どもは力を発揮するのでしょう。

子育ての分野だけではなく、会社の新人研修などでもピグマリオン効果を取り入れている所もあります。

前置きが少し長くなりましたが、ピグマリオン効果について、お伝えします。

1960年代に、ハーバード大学のローゼンタール博士が実際の小学校で行った実験です。ランダムに選んだ「今後知能が伸びるリスト」を学級担任に渡し、8か月後に再度テストをすると、リストの児童が顕著に伸びていたというのです。

このことから、一般的に「教師や親が期待すると子どもはその期待が伝わって努力するようになる」と言われるようになったのです。しかし、実際は少し違います。期待された子どもの行動が変化したわけではなく、期待した教師の行動バイアスが変化したのです。

実験を行ったローゼンタール氏も、追試を行った研究者たちも、この選ばれた児童の知能が大きく伸びた原因は「有望視される児童の扱いを教師が無意識に変えた為」としています。その教師の行動バイアスは「特別な児童に向けられる社会情動的空気」や「特別な児童に対するインプットの増加」「特別な児童に対するアウトプットの機会の増加」「特別な児童に対する特別なフィードバック傾向」などが考えられます。

前述の若手教員は、このことから、「特定の児童」に対して行動バイアスをかけるのではなく、「全て特別な児童」として捉え、学級全体を支持的な空気にし、インプット、アウトプットの機会を全員に対し増加しようと試みているのです。

では、家庭ではどうでしょうか。

「親が期待したら、子どもが応えてくれる」と考え子育てしてしまうと悲しい結果になってしまいます。自分がいかに子どもに期待しているかを伝え続けると子どもの、自己肯定感のみるみる下がってしまいます。子どもが求めているのは、期待ではなく、ありのままを受け入れてくれる愛です。

では、このピグマリオン効果から子育てで学べる事は何でしょう。

それは、子どもの可能性を信じ、自分の行動を変えることです。子どもが新しいことを始める時、親にもどのような状況になるのかわからないことが往々にしてあります。また、長期的にどこまで伸びるのかは誰にもわかりません。そんな時、どうせここまでしかできないであろうと過小評価をしてサポートしなかったら、子どもが伸びる機会を奪っているかもしれません。子どもの能力を過大評価することで、無意識にピグマリオン効果の実験時の教師のように、可能性を信じた親の行動バイアスが変わり、良い結果を生む可能性があります。

子どもの行動について怒ってしまいがちな大人ですが、大人の世界に子どもを合わせるのはなく、子どもが力を発揮できるよう可能性を信じ、環境を整えていく2023年にしていきたいです。

本年もよろしくお願ひいたします。

